第３８号　Institute for Interdisciplinary Studies KONAN University　２００４年１月３１日

甲南大学

総合研究所所報

甲南大学総合研究所　〒658-8501　神戸市東灘区岡本８－９－１　電話（078）435－2331（ダイヤルイン）

第36回　甲南大学総合研究所公開講演会

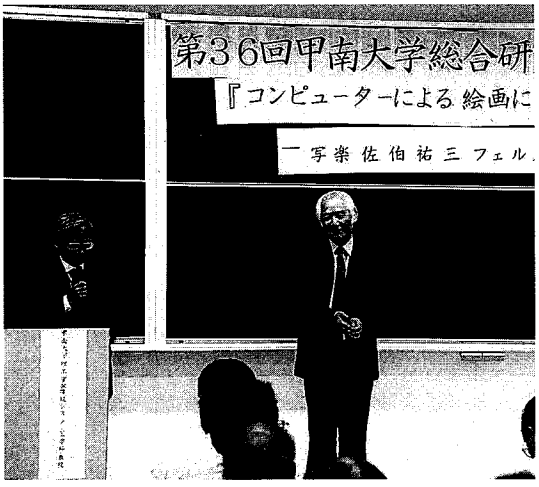
「コンピュータによる絵画にある謎の解明」

…写楽、佐伯祐三、フェルメール、ゴッホ…

講演者　医学博士　**辻田　忠弘氏**

（甲南大学理工学部情報システム工学科教授）

安西敏三所長：　甲南大学総合研究所の所長、法学部の安西と申します。総合研究所では春・秋の年２回公開講演会を行なっております。今年度の講師は甲南大学理工学部の辻田忠弘先生にお願いしまして、非常に興味深い、絵画をコンピュータを使って見てみたら、如何なる謎が解明されるのか、あるいは如何なる謎が新たに生まれるのかといったような、たぶんそういった類のお話になると思います。辻田先生は、1937年に大阪にお生まれになり、甲南大学理学部をご卒業になり、さらにアメリカ南カリフォルニア大学大学院で経営学を、またカリフォルニア大学大学院アーバイン校でもコンピュータサイエンスを学ばれて、大阪大学医学部より医学博士の学位も受けておられます。現在理工学部情報システム工学科の教授という地位におられます。著書として、辻田先生はたいへん神戸を愛しておられますこともあって、「神戸っ子のこうべ考」がございます。これはたいへん好評を博しておる出版物であります。同じ甲南大学総合研究所の「神戸と華僑」、「経営のためのコンピュータ」さらに「情報文明学の構想」といった類の著書をものにされております。それから私の前の総合研究所の所長でもあられました。そういうことでたいへん興味深いお話だと思いますので、みなさんご静聴願いたいと思います。では、辻田先生よろしくお願いいたします。



辻田忠弘先生：　皆さんこんにちは。よくおいで下さいました。今日は90分ほどの話をします。画像を使ってお話しますので、少し、部屋を暗くします。

（１）はじめに

今日のテーマは『コンピュータによる絵画にある謎の解明』となっておりますが、「謎」と言う字が漢字で書かれているのは私自身が学問として研究しているので、漢字の「謎」を使っていますが、今日お話しするのは数学とか心理学の理論などを使うのを減らして、できるだけ堅苦しくない、あくまでも

ひらがなの「なぞ」と言うことでお聞きください。皆さんが一つでも二つでも「ホー！」と気づいていただければ私は成功だと思います。皆さんがただ聞くだけでなく、皆さんご自身が考えて頂いて、「えー！こんな絵にこんななぞがあるのか！」、「こういう風に考えたらどうなるだろうか！」と探偵になったつもりでお話を聴いて頂きたいと思います。また、色々と気づかれた点があればお教えください。しかし、ここで、断っておかなければならないことがあります。今日の話は危ない話があります。「知的所有権」ということばをご存知ですか？そういう知的所有権に触れるような話が入ってきます。あくまでも今日は研究会ということで、研究会の場では良いが外部へだしてはいけないという資料がいくつかあります。後日ご希望の方には今日の講演内容を印刷物にしたものをお送りいたしますのでアンケートにご協力をお願いします。
では、パワーポイントで作成しました資料を基にお話しをはじめましょう。

（2）感性とはなにか

最初に「心」は人間の体のどこにあるのでしょうか。文系の学生に聞きますと「胸」をおさえます。医学部の学生に聞くと「頭」を指します。文学的には文字通り「心」臓を指すのでしょうが、医学的には脳の中にあります。「ものが見えるとはどういうことか：感性とは何か」について少しお勉強をしましょう。私の大学院での研究テーマは感性情報処理という分野であります。ものが見えるとは人によって見え方が異なります。目から入った情報が電気信号によって脳に入ります。脳内の感性、たとえば本能、知識、経験などによって目から入った情報が分析され、判断されてこの絵はすばらしい、この人は美しい人だ、この景色は暗いということを感じるわけです。それは経験、本能、知識によって異なりますので皆様の感じ方も各々異なります。私は私のワイフをすばらしい女性と感じて、結婚をしたのですが、友人達からは多くの犠牲をはらって結婚するのであるから「もうちいとましな女性を選んでは」と助言をされたことがあります。私は今でも彼等のワイフより私のワイフの方がすばらしい女性だと思っています。

私は私の感性を持っていますし、皆さんは皆さんの感性を持っておられる。私自身の感性で今回は絵を分析している訳ですから、皆さんの感性で感じられたこととは少し違うかもしれません。今日、皆様方にお土産として絵葉書を三枚入れています。その中に私の絵が入っていますが、私は大学生の時、私は画家？（勉強もせず絵ばかりに興味を持ち、スポンサーがつき、私の描く絵がかなりの値で売れていましたので）であったことがあります。

現在、甲南学園平生太郎基金をいただいて佐伯祐三の研究をコンピュータや心理学の手法を使って行っていますが、私は油絵を始めた10代の終わりの頃に佐伯祐三を知り、その生き方とその絵画にあこがれて東郷青児や岡本太郎、吉原二郎の活躍していた二科展に出品しました。佐伯祐三は28歳で二科展に入選しました。そこで私も28歳までに入選したいと思っていたら、20歳で最初に出した作品が二科展に入選してしまったのです。そのときの絵を絵葉書にして入れています。この絵から私の感性を推察していただきたいと思います。

もう一点は佐伯祐三の作品（下落合風景）です。これは戦火で焼けた謎の作品と言われてきたもので、佐伯祐三作品の理解者であり、最大の収集家であった芦屋の山本發次郎のコレクションの1枚です。その三分の二ほどが第二次世界大戦の戦禍に遇い、津山に疎開していた40点ほどが助かり、現在大阪市に寄贈され、これらの作品を中心とした美術館の建設が大阪中ノ島で進んでいます。実は焼けてしまったとされてきたこの作品が甲南小学校の校長室にありました。これを私が写真に撮り絵葉書にしたものです。山本發次郎氏の次女が甲南小学校を卒業するときに寄付されたものであることを遺族の方から伺いました。

このような本物の「幻の作品」が調査研究で見つかることがあります。その一方で贋作やあやしい作品、白黒のつかない作品が出現します。1995年８月に【武生事件】としてNHKの「クローズアップ現代」でとりあげた 150 点もの佐伯祐三の未発表作品出現の真贋事件があります。学者グループや画商グループが真贋を争い、私の研究室にまでその絵画の真贋のコンピュータ解析を求めて、それら絵画が持ち込まれました。

もう一枚の絵葉書は17世紀オランダのデルフトで活躍した風俗画家フェルメールの有名な「青いターバンの少女」の絵であり、今日のテーマの一つでもあります。数百年もの間、多くの人たちに愛されてきた作品で、この作品の少女にほれてしまったために奥さんと離婚をしてこの絵画の少女を妻と考えて

生きている人がいるほどです。

（3）脳と心のおはなし

お話しの本題に入る前に人間の脳の情報処理速度について考えてみましょう。医学的には「心」は脳にあるということは前述のとおりです。心臓移植を受けてもその人の心が元のままなのがその証拠です。たとえば、蜂が「左手」を刺したとします。すると一瞬のうちに「手が痛い！」と感じますね。これは手が感じているのではなく脳が感じているのです。手に蜂が刺したという情報が手から神経細胞を伝って脳に来て、脳が手に何かが刺しているので、「目」にお前見てこいという命令を神経細胞を使って送ります。手に蜂がいることを「目」が感知すると「脳」に蜂が止まっていますよと情報を伝えます。そこで、脳は本能や知識、経験からどのように処置をするのがよいかを考えます。「左手」を振って蜂を払いのける人もいますし、「右手」で蜂を払いのける人もいます。これが蜂ではなく蚊であれば「右手」でたたきます。この行為はすべて「脳」からの情報によって行われます。その時間は一瞬です。その速度の単位はミリセカンド（千分の一秒）です。コンピュータはナノセカンド（十億分の一）の単位で処理を行いますので、人間の脳の処理時間の千倍の千倍も速いので、計算などはかないませんが、人間の情報処理の方法がコンピュータと異なり、膨大な脳細胞の並行処理を行うので感性情報処理においては負けていません。感性とは外界の刺激に応じて感覚・知覚を生じる感覚器官の感受性とされています。すなわち、感覚的刺激や印象などの情報を受け入れたり、反応したりする能力のことです。皆さん方が持っておられる各々違う感性というものを使って、絵画にある謎を解明するのが私の研究です。

感性情報と色彩学の研究では皆様ご存知のアリストテレスの「感覚論」、ニュートンの「工学」、ゲーテの「色彩論」が有名です。ギリシャのアリストテレスは哲学的に色というものは白と黒が中心でその真ん中に黄、赤、菫、緑、青があるという研究をしています。次にそれを自然科学的に研究したのがニュートンです。彼はプリズムを使って太陽の光を分析して、光とは赤、黄、緑、青、菫、橙、藍とその中間に無限の色が連続することをはじめて捉えました。その後ニュートンより100年遅れて、ゲーテが色彩学の研究に大きな貢献をしています。ゲーテは色の見え方を社会科学的に捉えた研究を残しています。特に「眼の明暗順応の研究」は暗い所に入ると目が少しずつ暗さに慣れてきて見えてきます。「残像の研究」は太陽を見ていて、下を向くと目の中に太陽が残ります。この残像とは何なのかという研究をしています。皆様もよくご存知のこの三人がわれわれのやっている感性情報とか色彩学の大先輩であります。

（4）フェルメールの絵画の贋作のなぞについて

それでは本題に入ります。フェルメールの「青いターバンを巻く少女」の絵を見て何を感じられますか？何世紀にもわたって、最高の魅力がある絵とされてきました。皆さんはその魅力を感じられますか？私はこの絵の研究を始めた目的は何故この女性（この絵）にこれほど魅力があるのかという「なぞ」の解明にありました。2年間の研究の成果は先日国際学会で発表し、現在印刷中ですが、この中から話を始めます。私はこの絵を4回見ています。ことしの初めには大学院の学生にフェルメールの研究を修士論文にするために、一緒にオランダのハーグに行きました。フェルメールは遠近法など科学的技法を駆使して緻密に絵を描く画家として知られていますが、この絵には幾つかの疑問点「なぞ」があり、そこにこの絵の魅力（魔力）があります。例えば、光が左上から当たっているので実際はターバンは陰になるはずです。ターバンを実際の様に暗く描くと、この絵自身が死んでしまいます。ここが写真と絵画の大きな違いです。画家はモデルの少女のような対象物に対して、自分が感じたものをさらに加工して絵にしていきます。絵画は立体に見えるものを平面にするのですから、写実画であっても「ウソ」があるのは当然です。スライド画面のこの絵をじっと見てください。彼女が貴方に何か語りかけたいような顔をして、貴方の眼をじっと見ています。貴方と彼女の目線が合っていますね。でもじっと眼を近づけていくと、彼女は目線をそらします。実際は微妙に目線がずれているのです。ここがこの絵画の最大の魅力の一つなのでしょうね。この女性に魅かれて、彼女の眼を見る、彼女も自分の眼を見て、誘惑してきます。つい本気になって近づくと、目線を逸らして意地悪をするのです。そこに男性にとっても女性にとっても魅力があるのですね。心理物理学的実験の結果「あどけない」、「かしこい」などのほかに「いじわるである」、「つめたい」などの結果が出ています。

次にこの少女が2名、向き合ったスライドとお互

い背を向けあったスライドをお見せします。コンピュータグラフィックスの技術で作りました。どちらが魅力的に見えますか？人によって感じ方が異なります。右利き左利きによっても感じ方が違います。人間の感性は不思議だということです。

次に、世界で一番値段の高い幻のワインとして有名な「ロマネコンテ」のスライドを出します。一本40万円ぐらいします。私は元兵庫県知事の貝原氏が会長の「神戸ワインサロン」で世話役をしている関係でワインには少しうるさいのです？25年間に2000種類以上の世界のワインを飲んできました。次に私の写っている「ロマネコンテ」の畑のスライドをお見せします。この一画が「ロマネコンテ」の畑で一本40万円しますが、全く同じ種類のぶどうを植えたとなりの畑のワインは一本3万円なのです。この2種類のワインを飲み比べようという会があり、私も参加したのですが、その微妙な味の差（金額では37万円の差）は分かりませんでした。ワインは舌のほか口・喉の触覚、眼、鼻、耳（音楽や会話などの雰囲気）などの人間の全ての感覚で味わいます。2種類のワインの違いだけでなく、製造された年まで当てる人がいます。ワインの専門家であるためには、この微妙な差を見分ける感性が必要になります。絵画や音楽などの芸術の分野でも同じ事が言えます。

名画と呼ばれるものには真作、贋作、模作、模写があります。専門家としてこれらを見分けるためには高い感性が求められます。最近のテレビの人気番組に「お宝鑑定団」があり、本物が偽物かが鑑定され金額でその価値が示されますが、面白い番組ですね。

フェルメールの贋作事件としてメーヘレン事件（エマオのキリストの絵）があります。フェルメールの現存作品数は、36点です。その内4点は模作の可能性が高いといわれています。たとえば、「ダイアナとニンフ」はオランダの「青いターバンを巻いた少女」と同じ美術館の同じ部屋にあります。それは、フェルメールの作品になっていますが、真作でない可能性が高いのです。美術館では、フェルメールの作品として展示しているのです。怪しいと言われているのですが贋作としての証明がされていません。また、「フルートを持つ女」、「赤い帽子の女」はワシントンのナショナルギャラリーが持っていますがこれも偽物の可能性が高いと言われています。

超一流の美術館が本物でない可能性を隠さず展示しているのが現状です。ルーブル美術館にも偽物がいっぱいあると言われています。

オランダにはオランダ中世名画を展示する3大美術館があります。アムステルダムの国立美術館、デンハーグのマウリッツハイス美術館、ロッテルダムのボイマンス美術館の3館です。ボイマンス美術館にはフェルメール作品が1点もありませんでしたので、1938年に突然出現したフェルメールの「エマオのキリスト」を元マウリッツハイス美術館館長ブレディウスやレンブラン協会のお墨付で54万ギルダーの高額で購入しました。しかし、後にこれが偽物だとはっきりするのです。しかし、この美術館では、自分たちが失敗したことを忘れないために現在も飾っています。この事件があまりにも有名になったので、贋作の「エマオのキリスト」を観るためにこの美術館を訪れる人がいるほどです。

第2次世界大戦でフェルメールの「キリストと悔恨の女」と「エマオとキリスト」の絵がナチスに渡ります。戦争が終わって、ナチスの将軍からこの「キリストと悔恨の女」を取り戻して、誰がナチスに売却したのかを調べていくと画商のファン・メーヘレンの名がでます。戦争中に敵国のナチスに売ったことでファン・メーヘレンが軍事法廷にかけられます。そのとき、ファン・メーヘレンは、「この絵は私が描きました」と告白し、「エマオのキリスト」の絵もフェルメールじゃなくて私が描いたと告白するのです。彼は、敵国に名画を売った罪より、偽物を作った罪が軽いと思い、告白したのです。法廷でキャンパスと絵の具と筆を用意して描かせた「寺院のキリスト」を見て、「エマオのキリスト」も彼が描いたということがはっきりするのです。

（5）ゴッホのひまわりのなぞ

次にゴッホの3枚の「14本のひまわりの絵」をスライドでお見せいたします。皆さんがよくご存知のひまわりの絵です。この「14本のひまわりの絵」は世界に3枚あります。ロンドンのナショナルギャラリー、日本の新宿にある安田火災海上の東郷青児記念美術館とアムステルダムのゴッホ美術館で、この順に描かれたことが最近分かりました。それぞれ寸法が少し違います。制作年月日が書かれていない作品の描かれた順番と年月がなぜ分かったかと言いますと、ちょうどそのころゴッホはゴーギャンと一緒に住み、ゴーギャンと一緒に長いキャンパスを切って使っていました。ゴーギャンのキャンパスの続き

に東郷青児記念美術館のひまわりが描かれていたことが分かったために、その制作年月が分かったのです。

これで、この東郷青児記念美術館の作品が本物と言えるでしょうか。同じ絵がなぜ3枚もあるのでしょうか。私はこれらの作品があまりにもすばらしい作品なので、あえて本物であることに疑いをかけて研究を始めました。勿論、キャンパスや絵の具などの物理学的鑑定からは本物といえますし、世界の多くの鑑定家が認めた、54億円もした絵画ですから、私が絵画の専門の研究者や評論家であれば多くのゴッホの研究者や愛好者から袋だたきに会うか馬鹿にされるでしょう。まず、「ロマネコンテ」か「隣の畑のワイン」かの違いと同じく、絵画についての研ぎ澄まされた感性の持ち主による鑑定眼が必要ではないかと考えて、3点の作品を鑑賞するためにロンドン、アムステルダム、東京を数回訪れました。ここに本日のお話しの2番目の「なぞ」があります。皆様とともにこのなぞを解きたいと思います。

ゴッホは10年間の画家生活で1600点の作品を残しています。そして、37歳でピストル自殺で亡くなります。精神分裂症だったことは皆さんも良くご存知ですね。ゴッホの作品は生前一枚しか売れず、画商であった弟テオの援助で貧しい生活を送ったといわれています。現実にゴッホの終焉の地であるフランスのオベールに彼の生前の部屋が保存されていますが3畳一間の屋根裏部屋です。ゴッホの弟テオとその妻ヨハンナはゴッホの作品を理解し、ほとんどの作品を大切に保存して、ゴッホとテオの死後、ヨハンナが世界にその価値を広めた、とあります。

これはおかしいと思いませんか？今日あれほど世界中の人が見て、素晴らしいと思うゴッホの作品を、いくら当事と今は違うといっても誰も理解できなかったというのはおかしいですね。一枚しか売れなかったというのは、誰もがその価値を理解しなかったから売れなかったわけです。ところが、弟テオは理解していた。画家でもなく美術評論家でもない弟の妻のヨハンナも理解していた。これもおかしなことです。

ゴッホは400枚もの本物の浮世絵を集めているのです。オランダのゴッホ美術館にゴッホが集めたその浮世絵があります。絵が一枚も売れずお金がなくて、弟に助けられていた貧しい画家のゴッホにいくら好きで安かったとしても、何故400枚もの本物の浮世絵を買うことができたのでしょうか。ゴッホは浮世絵に憧れ、日本を訪れることを夢見て、影の無い浮世絵から想像した日本に近いと考えた南フランスへ行き、そこでひまわりの絵を描いた訳です。

更に、何故ゴッホほどの情熱の画家が自分のひまわりの絵を何枚も模写したのでしょうか、売ることを目的にしなければ、いくらうまく描けても、構図の違うひまわりや他の題材を描くはずではないでしょうか。

また、3枚の絵画の寸法が違うのは何故でしょうか。模写するなら同じ寸法でいいはずだと思いますが。ただし、現在では模写するときは、絵の寸法を変えるという約束があります。よくルーブル美術館などで、模写している人がいますが、寸法を変えて描いています。これらの「なぞ」から、模写が行われたと考える場合には次のことが言えるのではないでしょうか。

（1）買主から絵を名指しで依頼を受けた場合にゴッホが模写をおこなった（生涯に1枚しか売れていないのであれば、そのようなことは考えられない）

（2）弟子が先生の絵を勉強目的で模写した（ゴッホに弟子がいたと言う話は知られていない）

（3）レンブラントのように工房を設けて弟子に描かせるか、手伝わせて多くの作品をのこした（弟子もいないし、工房も持たなかったために、ゴーギャンたち画家仲間と暮らすことを望んでいたとされている）

また、世界的な美術館鑑定家である元メトロポリタン美術館長トマス・ホーヴィングも彼の著書「にせもの美術史（朝日新聞社）」でフランスの数学者で元画商で鑑定家アラン・タリカの「ゴッホには弟子がおり、生前からかなりの絵が売れていた。安田火災のひまわりはゴッホの弟子でオランダ人のフランク・フェネッカーの作品ではないか」との説が、かなり説得力があるとしています。もし、当時ゴッホの作品の価値が理解され、作品が売れていたのなら、ゴッホに弟子がいて、模写作品が有ったとしても、ゴッホが浮世絵のコレクターであっても理屈は合います。しかし、ゴッホの歴史は完全に塗り替えなければなりません。これほど名画の鑑定は難しく、名画であればあるほど「なぞ」を持っています。フランスのオルセ美術館に展示されていたゴッホの作品の一枚が弟子の作品と分かり、現在は倉庫にしまわれています。皆様もこのような名画の「なぞ」解きに挑戦してください。

（6）フェルメールの「青いターバンの少女」のなぞ

次に前述のフェルメールの「青いターバンの少女」の「なぞ」解きに入ります。

フェルメールの「青いターバンの少女」が単なる一人の少女の絵であるにもかかわらず、なぜ何世紀にも渡って多くの人たちを魅了してきたのでしょうか。その「なぞ」の解明に対するお話しをしましょう。「青いターバンの少女」の魅力は少女の目や唇による少女のあどけなさ、モデルとしての初々しいぎこちなさ、語りかけてくるような感じにあるといわれてきました。私はそれだけではなく、青いターバンによって少女のほんとうの顔の中にあるものが隠されているのではないかと考えました。よく見ていると可愛いだけでなくなんとなく意地悪なものが感じられるのです。また、少女でなく成熟した女が見えてきて、ドキッとすることがあります。そこでコンピュータとフォトショップというソフトを使って、ここに示すターバンの色だけを変えた5枚の「ターバンの少女」の絵を創りました。もとの青いターバンの色をこのように赤、黄、黒、緑、白に変えることによって、顔は全然変わっていないのに、この絵の少女の顔が変わって感じられるようになります。この少女の本当の魅力的な顔を見つけるのがこの実験の目的です。これらの絵画を被験者にみせてその感じ方をSD（Semantic Differential）法と呼ばれる心理学の手法を使って分析して結果をだします。我々生命体というのはすごい能力をもっているのです。たとえば、レベルが低いと思われている大腸菌でさえ、化学実験では造れない糖尿病の薬である人間のインスリンや成長ホルモンなどの蛋白質を造ります。緑の葉を持つ植物なら光合成ででんぷんを造ります。私は潜在的にすばらしい能力を持つ被験者である人間の脳の中にある感性を使ってこういう実験をしているわけです。

この実験方法は被験者にいろいろなターバンの色の絵をコンピュータを通して見せて、被験者の感性（脳）がそれを潜在的にどのように感じるかを調べます。

その結果、青いターバンの色の絵には美しい、立派な、好ましい、上品な、頭の良さそうな、若々しい、新しいといった感情表現が出てきます。それに対して幼い、固くるしいなどのマイナスのイメージが出ています。赤いターバンにすると情熱的な、派手な、活発な、騒々しい、明るい、お転婆、積極的な、陽気な、しゃれたといった感情表現が指摘されます。この実験を他の色でも行い、さらに印象分析実験や比較分析実験によって、より正確な値が得られます。これらのデータの分析から言えることは「青いターバンの少女」は賢く純潔であどけない聖女のような顔と、情熱的で成熟したずるい娼婦のようなおとなの女の顔をもつことが分かります。ここに男性だけでなく女性までもひきつける妖しい魅力（魔力）をもつ女性として、数世紀にわたり多くの人たちを魅了してきた魅力の「なぞ」の一部が解けたと思います。

次はオランダの国立美術館にあるフェルメールの「牛乳をそそぐ女」の魅力の「なぞ」の解明ですが、私はこの美術館にある有名なレンブラントの「夜警」と比べて、こちらの方が印象に残ります。あの美術館で一番素晴らしい絵がこの絵ではないかと思います。

遠近法などの科学的な技法を駆使して作品を制作したとされるフェルメールの作品の中で、この絵は机などを完全に遠近法を無視して描いています。「なぜ」遠近法を無視したのでしょうか。コンピュータを使って正確に遠近法を取り入れた「牛乳をそそぐ女」を作成して、元の絵との比較を被験者を使って先ほどのSD法で行いました。正確な遠近法を取り入れた作品よりも迫力、安定性などにおいて元の絵に魅力があることが分かりました。

（7）佐伯祐三絵画のなぞ

佐伯祐三は1898年4月28日に大阪市大淀区中津に四男三女の次男として生まれます。父親は光徳寺の13代住職であり、佐伯祐三は府立北野中学校に進み、4年生頃から赤松麟作の塾に通いデッサンや油絵を習いはじめます。

同校卒業後上京し川端画学校に入り藤島武二の指導を受け、1918年東京美術学校に入学します。同校在学中に父、弟そして伯父があいついで死去、強いショックを受けて、死についての想念が佐伯をとらえて、その後の佐伯の生き方に大きな影響を与えます。1920年、日本画家の川合玉堂の弟子であった池田米子と結婚します。1923年、東京美術学校藤島教室を卒業して、同級の7名と薔薇門社を結成し第1回展を開きます。関東大震災後の11月に妻米子と長女弥智子を伴って渡仏します。1925年秋のサロン・ドートンヌに出品した「コルドヌリ（靴屋）」「煉瓦屋」が入選し好評を得ます。この時、このサ

ロン・ドートンヌには妻米子の作品も入選しています。

1926年3月に一旦帰国した佐伯祐三は東京下落合のアトリエに戻り、里見勝蔵、前田寛治、小島善太郎、木下孝則と1930年に協会を結成して、その第1回展に滞欧作11点を出品します。同年の第13回二科展には19点を特別出品し、二科賞を受け画壇の注目を集めます。この時もまた、同じ二科展に妻米子の作品も入選しています。

1927年春再び家族を伴ってパリに発ちます。1928年3月頃からは本人の結核と娘の弥智子の結核による精神的苦痛で心身の不調が顕著になり、6月には自殺未遂（佐伯祐三クラマール謎の失踪事件）でパリ郊外のエブラール精神病院に入院します。佐伯祐三は同年8月16日同病院で、その30歳の短い生涯を終え、その2週間後に娘も短い生涯を終えます。画家としての実質的な活躍期間は3年で、その間に400点以上の作品を残しています。

ここで大切なことは佐伯がフランスに渡り、サロン・ドートンヌに出品に入選して、佐伯祐三の名を挙げるわけですが、その展覧会に妻の米子の作品も入選しているのです。1926年に一時帰国し二科展で入賞しますが、その時も米子の作品が入選しています。

佐伯祐三の絵画には荒っぽい精神分裂病的な面と、繊細な神経質的な面があり、2人の人物がいるのではないかとの「なぞ」があります。ここでもう一人の人物としてうわさに上がるのが日本画家の河合玉堂の弟子でもあった妻米子です。

我々は今、佐伯祐三の作品を蒐集してデジタル化を進めています。甲南大学のネットワークの中に仮想の佐伯祐三美術館を造ろうとしています。現在300点ぐらい集まっています。何処の美術館へ行っても佐伯の作品は2、3点しか見られませんが甲南大学のバーチャル・ミュージアムでは全作品がネットワークに繋がっていればどこからでも見られるのです。

前述の佐伯祐三クラマール謎の失踪事件は1928年6月の死が近づき、ベッドに寝たきりになり、絵描きの友人が交代で看病していた早朝に彼は失踪してしまいます。昔、彼が住んでいたクラマールというパリ郊外の森で保護されます。何故死にかけている佐伯がそんな所へ行ったのかという「なぞ」が最近まで解けませんでした。考えられるのは自殺目的でしたが、妻や周りの関係者が皆自殺は考えられないといったことやなぜ末期の結核患者を精神病院に入院させたのかなどの、問題が「なぞ」になるのです。

佐伯祐三の研究の第一人者でもあり、彼の親友であった阪本勝（元兵庫県知事）が、佐伯祐三の伝記の中で、彼は自殺を図っていないことと、彼が精神分裂病でそのことがゴッホのように彼の芸術創造活動に大きな影響を与えたと書いています。一昨年、日本病跡学会で佐伯の最後の診断書が公表されました。フランスでは患者の誕生後150年間はカルテの公開は禁じているのですが、日本の文部科学省と厚生労働省の働きかけで許可が出たそうです。ここにそのコピーがありますが、この診断書の内容から佐伯祐三の入院時に首に自殺の傷跡があり、彼が精神分裂病でなく、ノイローゼのようなものであることが分かります。要因に6歳の娘に結核をうつした責任に対する非常な苦しみがあるといえます。娘は佐伯祐三の死後1週間後に死亡しているのです。この診断書から「なぞ」が解明されたのです。診断書一枚が多くのことを語っているのです。

次に今から8年前に福井県武生市の美術館開設に対して、佐伯の未発表の多数の作品（吉園佐伯）が持ち込まれ、美術館の目玉にするため購入が検討されたことがあります。学者グループと画商グループとの間で本物か贋作かで激論の末、武生市は購入を取りやめました。NHKまでがこの事件を「クローズアップ現代」で取り上げました。実は、私のところにもこのコレクションの真贋問題のコンピュータによる解明を期待して持ち込まれました。

ここでいう本物の根拠は佐伯の絵はもともと荒削りで、現在、佐伯の作品とされる絵画は佐伯が描いた作品に妻米子が加筆して完成させて世の中に出していたが、この度、米子の加筆の無い佐伯の絵が発見されたというものでした。米子が佐伯より絵が上手だったと実証されればそう言えるかもしれません。

佐伯米子は死後まだ50年が経っていませんのでその作品は公開されていませんが、私は研究目的で東京の国立近代美術館の倉庫にある作品をはじめ何枚かの佐伯米子の作品を写真に撮ることができました。絵画の研究というのは絵画に知的所有権という問題があって、研究だけではなく、研究成果を発表するにも制限がある場合があります。

次に明らかに佐伯祐三が一人で描いたことに確証が持てる作品を集めました。例えば、東京芸術大学に保存されている在学中の作品のように米子との結婚以前に描いた作品や、彼の後輩で現在一流画家と

される大橋了介、荻須高徳、横手貞美と一緒にフランスのモランにスケッチに行った時に彼等と共に同じ所を描いた作品で彼等の現存作品と比較できるものです。

これらの佐伯祐三の絵画と佐伯米子の作品をコンピュータに取り込み心理物理的手法を使って比較をしてみました。佐伯祐三の作品に非常に近い米子の作品はありますが、佐伯の絵に米子が手を加えて現存の多数の佐伯の名画を完成させたという結論には至りませんでした。私の考えでは可能性のひとつとして、当時佐伯の周りにいた多くの日本人画家の内の誰か名の出なかった画家の作品が日本に持ち帰られ、後にその一部に佐伯のサインを入れたものではないかと思います。佐伯の作品には色々なサインがあり、無い作品も多いが、なぜサインを変えたり、入れなかったりしたのでしょうか。一つのなぞが解明したら、また、別のなぞが出てきます。

現在、甲南学園の創設者で文部大臣も務められた平生釟三郎先生のご親族の御寄付による平生太郎研究助成基金をいただき以下のような「佐伯祐三絵画の謎」の研究を進めています。

（1）なぜ、天才佐伯がブラマンクに50号の自信作を見せ「このアカデミック、自分の絵を描け！」と烈しく非難され、なぜ、前のスクリーンでお見せするように、すぐに画風を大きく変えることができたのか。

（2）ここで紹介する佐伯の作品の多くがブラマンク、ルノワール、セザンヌ、ユトリロ、レンブラント、モジリヤーニなどの影響を受けているが、なぜ天才佐伯が有名画家の真似をしたのか。その一方で、佐伯が最も憧れてきた画家ゴッホの生き方は真似たが、ここで紹介する有名な2人の教会の絵のように画風はなぜ真似なかったのか。

（3）なぜ、フランスの景色にあこがれ、フランスを画いているのに東洋的な雰囲気がでているのか。

（4）佐伯が訪れたローマやナポリにも佐伯好みの裏町があるのに、絵を一枚も描かず、なぜ、パリの裏町にこだわったのか。これらの「謎」の解明を進めています。

（8）浮世絵師写楽のなぞ

浮世絵師写楽には一般に次の5つの「なぞ」があると言われています。

（1）写楽は誰か。

写楽という人物が実際には居たとは考えられないのです。誰かが写楽になって、その作品を出したのではないかというのが一般的な定説です。

（2）なぜ、10ヶ月で忽然と消えたのか（活動期間にはさまざまな説があるが、「浮世絵類考」や「三馬補記」などの記述から寛政6年5月から寛政7年2月までという説がもっとも有力です）。

（3）なぜ、浮世絵は彫師や刷師など多くの人たちの共同作業で製作されるものなのに、わずか10ヵ月で140点もの浮世絵作品が残せたのか。

（4）なぜ、無名の写楽が江戸一番の版元（蔦屋重三郎）に使われたのか。

（5）なぜ、10ヶ月の短い間に画風が4度も変化したのか。

この写楽の「なぞ」解きの最終目的は数少ない世界的日本人画家写楽とは誰なのかということです。誰か歌麿呂か北斎に匹敵する天才浮世絵師か、何かの事情でこの期間に写楽の名前で作品を出したが、売れずにまたもとの形に戻ったと考えるのが一般的な考え方です。

多くの研究者がいろいろな分野から研究していますが以下の取り組みの問題から未だに明解な解答は得られていません。

①「写楽」研究の多くが、写楽が去って40年以上後に出版された斉藤月岑の「増補浮世絵類考」に重点が置かれてきた。

②そのため「写楽は誰か」の解答も「増補浮世絵類考」にある「能役者斉藤十郎兵衛」説が長年にわたり有力とされてきた。

③しかし、「能役者斉藤十郎兵衛」説には彼の絵画に対する資料も画家としての史料も一切残っていないために、早くから問題とされてきた。

④梅原猛の豊国説や田中英道の北斎説はじめ蔦屋重三郎説、山東京伝説、円山応挙、喜多川歌麿呂説など20以上の説が出されてきている。

以上のように、今までの浮世絵研究の中心が資料分析中心の研究であり、西洋での美術史研究の根幹とされる様式検討を中心としたモレリアン・メソッド（顔の場合は目や口の様に画面を細かく解剖し、その細部の形や構図、技法、色使いなどから絵画を分析する方法）を使った研究やこの度の研究で使用したセマンテック・ディファレンシャル法（心理・物理的手法）等の自然科学的な技法による研究はほとんどされてこなかったと思われる。

この度、私が取り組んだ写楽研究の方向は写楽の役者絵の目の特徴を上述の自然科学的に調べて、写

楽浮世絵の特徴をつかもうとする取り組みです。

写楽が10ヵ月で忽然と消えたなぞは何なのか—役者絵師としての「写楽」が嫌われ、その製作が中止され、浮世絵の歴史から忽然と消え去った理由は他の浮世絵師のようなプロマイド的な美人の女形も美男の男役も製作せず、役者の武骨さを強調し、女形においてもそれを演ずる男の役者の男としての個性を表に出しているところにあったと思われる。
この問題をSD法により解いてみました。

当時の浮世絵の目的は芸術ではなく、現代のプロマイド的に楽しむものであったと思われます。写楽の絵は歌麿呂の美人画のようにきれいでのびのびしたものではなく、女形でも男性である役者の個性を出しすぎ、プロマイド的な要素がなかったことから、結局売れずに消えてしまったのではないかと思われます。

東洲斎写楽の現存する浮世版画141点のうち、最も人気がある第一期作28点はすべてが役者絵であります。役者絵なので女性もすべて男性が演じています。役者絵以外でも写楽は女性の絵画を一点も残していません。

そこで写楽の第一期の男女の役者絵をコンピュータに読み込み、男女に分けて目に焦点を当てて分析を行いました。役者絵の女性は男性が演じているにもかかわらず、女性を強く表すためにマイナスイメージの女性の特徴を持たせていることが分かりました。

実験の方法はある一人の男役の顔に男女6名ずつの役者の目を当てはめた目だけ異なる12名の顔を作り、被験者10人に対して、12名の顔の目が男性の目か女性の目かという質問を行ないました。その結果、ほとんどの被験者が正確に男女の役者の目を区別することができました。

次に、目の交差角の分析を元に各々の目を6グループに分類し、各グループから1つずつの目を選び1人ずつの男女の顔に当てはめたものを12名分コンピュータグラフィックスで作りました。それらを一度にコンピュータの画面に表示し、被験者に30ペア60種類の感情表現(美しい、醜いなど)を示して、最も当てはまると思われる役者絵を被験者に選んでもらいました。

その結果、男女どちらの場合であっても、男役の目を当てはめた方が多くのプラスイメージの感情表現を得ることができ、女役の目を当てはめたときにはマイナスイメージの感情表現を得ることが分かりました。

真の芸術家であった写楽は大衆の要求するプロマイド的な美女の女役や美男の男役をあえて製作せずに、一部の写楽の芸術としての浮世絵を理解する人たちのために、女形においても女性の可愛さよりも女の嫌らしさを強調することにより、それを演じる男の役者の男としての個性を表に出した作品を制作したために、役者絵師としての「写楽」が嫌われ、浮世絵の歴史から忽然と消え去った理由ではないでしょうか。この研究をさらに発展させ、最終目的である「写楽」はいったい誰なのかを解明していきたいと思っています。

時間になりましたのでこれで終わりますが、名画における「なぞ」の解明のお話はいかがでしたか。皆様も、この機会にぜひ名画のなぞ解きに挑戦してみてください。楽しいですよ。

これで終わります。有難うございました。

＜以上は2003年6月7日（土）甲南大学521号講義室にて開催された講演に基づく＞

平成14年度研究チーム活動中間報告

「グローバリーゼーション下の各国社会保障改革比較」

ＮＯ.81　研究幹事　水島治郎　（前法学部助教授）

本研究チームは法学・経済学・政治学の研究者が集う学際的な研究チームである。福祉国家という研究対象に異なるアプローチを用いつつ、同時に他分野の研究手法を相互に摂取することで、きわめて実りある研究活動を行うことができた。ところで近年の福祉国家改革の多くに共通していることは、改革を通じて福祉給付受給者、あるいはその予備軍の就労を促進し、労働市場への統合を進めるワークフェア改革がその重要な柱となっていることである。この福祉国家の課題は、法学・経済学・政治学のいずれにとっても興味深い研究対象であり、研究会でも発表されたのはもちろん、活発に意見が交換された。このように現在ワークフェアが脚光を浴びている背景としては、以下の二点があげられるだろう。第一は、福祉国家の財政的問題である。高齢化や医療技術の進歩によって福祉支出は増加する一方、福祉支出を支える高率の税・社会保険料は経済のグローバル化による国際競争の激化によって重荷となっている。特にＥＭＵ参加によって財政政策の手足を縛られたヨーロッパ諸国は、健全財政の実現のために各国で福祉支出の削減が至上命題となった。このような環境の変化のもと、ワークフェア改革を通じて福祉給付の受給者を税・社会保障負担の負担者に転換し、課税ベースを拡大することで福祉国家の維持が目指されている。第二は、社会的な配慮である。特に90年代後半に各国で政権に到達した社会民主主義政党において、この社会的配慮はワークフェア推進の重要な動機となっているように思われる。すなわち『第三の道』の唱道者であるギデンズが強調するように、長期の福祉給付への依存は、結果的に彼らの社会的排除を誘発し、社会を分断させる。むしろ労働市場への参加を通じてその社会的包摂を進めていくことが必要とされる。とりわけ技術革新の著しい今日、労働技能を維持し絶えず向上させていくためには、職業訓練や労働過程への不断の参加が不可欠と考えられている。

なおこの点で、1990年代から現在に至るオランダの改革は、先進国の福祉国家改革のあり方と方向性を考える上で極めて興味深い。オランダでは1994年から2002年まで労働党のコックを首班とする連合政権が二期継続したが、この政権下で、従来キリスト教民主主義政党優位のもとで形成され、「保守主義型」あるいは「大陸型」福祉国家の特徴を色濃く持つオランダの福祉国家は重大な変化をとげた。特に福祉給付受給者の所得保障から就労促進への転換、すなわちワークフェア改革はその中心であり、改革の結果として各種の社会保険や公的扶助は、「給付所得より就労を」をキー・コンセプトとして就労促進に明確に舵を切ることになった。

この改革はおおむね三つの柱からなる。第一は分権的な被用者保険制度の抜本的改革。大陸型福祉国家に一般的である、職域に基礎を置く分権的な被用者保険は廃止され、政府の責任のもとで一元的な管理・運営がなされる統一的な保険制度が導入された。第二は福祉と雇用の連携の開始。「雇用・所得センター」の設置、公的扶助や失業保険の受給資格への就労義務の導入などの制度改革により、従来分断されていた福祉政策は明確に雇用政策と連動するようになり、所得保障に偏していた福祉給付は就労との結びつきが大幅に強化された。第三は職業能力の開発をはじめとする、就労支援の大幅強化。受給者への職業訓練・職業紹介などの就労支援サービスが大規模に導入されたほか、失業者の吸収を目指して公的雇用が拡大した。以上三点にまとめられる改革の結果、オランダにおける福祉国家は戦後最大の変化をとげた。本研究会では以上のような事例を比較対照しつつ研究することで、変革期にある福祉国家の動態を明らかにすることが試みられた。

「マックスヴェーバーにおける『民族』問題とその周辺」

ＮＯ.82　研究幹事　黒田忠史　（法学部）

この間、「ナショナリズム」や「民族」をめぐる議論が論壇をにぎわし、「民族」概念に関する注目すべき文献が続々と発表されている。わが国では、小坂井敏晶著『民族という虚構』（岩波書店）姜尚中・森巣博『ナショナリズムの克服』（集英社）、『民族』（ミネルヴァ書房）、小熊栄二『＜民主＞と＜愛国＞』（新陽社）など枚挙に暇がないが、外国においても同様の傾向が見られる。グローバリゼーションの急進展と冷戦体制終結後の複雑な国際関係の中で激化する民族対立、噴出するナショナリズムという深刻な現実に直面して、研究者の

関心があらためて「国家」や「民族」の問題に集まっているといえるであろう。われわれの研究チームは、テーマをマックス・ヴェーバーの「民族」(ナティオーン、フォルク)概念の内在的理解に限定しているとはいえ、新しい研究動向にも関心を寄せざるを得ない。毎月のヴェーバー文献の輪読会のほかに、2003年11月には、1年間のドイツ・ハイデルベルク大学での在外研究を終えて帰国されたばかりの橋本直人氏(神戸大学発達科学部助教授)をゲストに招いて報告と討論の会を開き、ドイツにおけるヴェーバー研究の現状と最新文献についての情報を提供していただいた。

チームメンバーの個別の研究の進捗状況としは、小島は、ロシアの「帝国」性と民族問題をめぐる最近の研究にとってヴェーバーのロシア社会論がどのような意義をもつのかを検討している。安西は、J.S.ミルやアクトン、トクヴィルやバジョット、スペンサーやギゾーなどとの関連にも留意しつつ、福沢の明治憲法や市制町村制、さらには教育勅語についての見解を調べることによって、福沢の「国体」についての考察をすすめている。井口は、政治学者・丸山眞男のナショナリズム論(その類型や変容など)についての研究をすすめ、高木は「帝国日本への反逆者」とされた「尾崎秀樹のインターナショナリズムの真実」と言う論題での論文の執筆を目指している。内藤は、官僚制を軸にして、ネーションをパトスとアンシュタルトの側面から考察しており、土居は、最初期の市民概念をヴェーバーがどう捉えていたかを研究している。堀は、目下、平生基金による大型研究のまとめに取り組んでいるが、総合研究所公開講演会での講演(本「所報」前々号掲載)でイスラーム教徒の「民族」性をめぐる問題状況についての知見を披露した。黒田は、ヴェーバーの「民族」概念の正確な理解を共同研究のベースに捉えるべく、引き続き概念史的研究に取り組んでいる。

「イギリスと日本」

NO.83　研究幹事　西條隆雄　(文学部)

本研究チームは2003年6月19日(木)、第3回研究会を開き、安西敏三氏による「福澤諭吉の歴史哲学—19世紀イギリス歴史思想との関連—」の報告を中心に討論を行った。安西氏は福澤の歴史観を形成する(1)中華と文明の概念、(2)明治知識人および自由民権家の進歩・進化の概念、および(3)「進歩」の行方、を詳細にたどった。

それによると、東夷としての日本は、文明の中心である「中華」に目標を置き、これを目指すことになるが、幕末の知識人は華夷思想からの解放を求めて「中華」を「西欧」におきかえ、「文明国」西欧に文明開化を求めた。

その文明開化(civilization)を福澤は、J. S. Mill やBuckle の史観にならい、人間と社会の完全への道であると考える。文明は智徳の進歩であり、世を風靡した Spencer の進化論を念頭に、不整合・不明確なものから整合・精密へと分化してゆく変化として、文明を目的論的にとらえた。そしてこの進歩論を、報告者は当時の知識人、津田真道(1829-1903)、加藤弘之(1836-1916)、またその実践家矢野文雄(1850-1931)、馬場辰猪(1850-88)、植木枝盛(1857-92)、金子堅太郎(1853-1942)による賛否両論とつきあわせながら、福澤の進歩観をとらえていった。

この推論にたいして、やや「情緒的」な日本人が、ミルの『自由論』、スマイルズの『自助』、スペンサーの『進化』をどの程度にまで理解していたか、あるいはこうした著書の恣意性についてどれだけ認識を深めていたかについて興味深い質疑応答が繰り広げられた。

第4回研究会は中島俊郎氏による「黄禍論と白禍論のはざまで」と題して、日露戦争における成果と日本人魂のすばらしさに酔いしれているさなかで、3名の国際的視野を持つ日本人が英文で著した日本論を取り上げ、紹介・解説をした。その三名は村井弦斎(1963-1927)、岡倉由三郎(1868-1936)、朝河貫一(1873-1948)である。

村井は東京外大の露語科を中退し、以後は独学で経済学・政治学を学びつつ22歳で渡米し、二年後に帰国して報知新聞社に入る。雑報、劇評、書評の傍ら、森田思軒の門下に入り『小説家』『日の出島』『食道楽』などの小説を書いた。岡倉は元福井藩士の三子で天心の弟。東京大で博言学を学び、東京高師教授。朝河は歴史学者。苦学して米ダートマス大学に学び、つづいてイエール大学大学院に学び、両大学を首席で卒業した後イエール大学教授となる。『日露衝突』(明治38年、英文)を著し戦争の原因とその波及を米国に説明するとともに、

『日本の禍機』(明治42年)によって国際的視野から日本の進路を憂いた。彼の『入来文書』および『荘園研究』は世界的に有名。

村井は小説 *Hana*： *A Daughter of Japan* (1904) において、日本人の「覚悟」つまり国家のために身を捨てる武士道精神を説明するとともに、日露戦争は "humanity, civilization, the world's peace" のための聖戦であることを説いた。岡倉は *The Japanese Spirit* (1904) において "yellow peril" (「黄禍」) の誤解を取り除くため、日本人の精神構造 (儒教精神) および従容として死に赴く日本人の死生観 (仏教の教え) を説明するとともに、日本人にはオリジナリティーが欠けるとしても、細部においては完璧なほど独創的である点を挙げ、この原因は周囲の大文明国から学び取ることを念頭においてきた歴史にあると説いた。そして、この弱点は国家の経済状態からきており、目下脱却しようとしている過渡期の現象であって、さして重要視する必要はないと考える。

朝河 (イエール大学教授) は *The Russo-Japanese Conflict: Its Causes and Issues* (1904) を著し、日露戦争の原因を経済的起因とし、新旧文明の衝突、つまり農業大国と工業日本の考え方と政治姿勢の違いの衝突として論じた。ロシアは旧文明国で独裁国、人民を疑惑の目で眺め、為政者と人民の間に「不自然な」格差を作り上げており、この体制を極東に拡大することは必定であるのに対し、日本は早くからアメリカの制度を取り入れ、新しい文明国として産業と教育を立国の基本理念に据えて個人の力を引き出し、フェアな貿易を促し拡大しようとする。満州と朝鮮において衝突した両国の利害は、どちらが勝利を得るかによって世界の人口の三分の一がいずれかを選択せざるをえなくなり、 最終的には "humanity" を守ることができるかそれともこれを放棄するかの衝突であると結んでいる。

なお、研究会とは別に、松村昌家氏が研究テーマである岩倉使節についての論考を「岩倉使節団のマンチェスター〈回覧実記〉と題うって『英語青年』(2003年1月号) に掲載されたことを追記しておきたい。次回研究会は12月を予定している。

平成15年度研究チーム概要

◎研究課題　(No.84)

「ミッション・ネットワークと帝国」

＊研究の目的

18世紀末以降、大英帝国の拡大と再編のプロセスの中で、英国各地に設立されたミッション諸協会は、帝国各地に男女ミッショナリーを派遣し、宗教的、文化的、社会的なネットワークを築きあげていった。帝国の拡大を物理的・精神的に支えたキリスト教ミッション諸団体が、植民地で他の宗教、呪術信仰と演じたせめぎあいを分析しながら、彼らのネットワークが現代に残した遺産を多角的に検証する。

＊研究の内容および効果

上記で示したミッション諸協会から帝国各地に派遣されたミッショナリーの男女は、現地でさまざまな異文化経験を重ねながら、現地の社会、文化システムを変容させるとともに、自らの文化、人種概念をも揺さぶられることになった。そのせめぎあいを具体的に検討しながら、脱植民地化のプロセスで彼らが現地に蓄積した遺産がどう関わっていたのかを考察する。

すでに2001年４月（～2003年３月予定）以来、上記テーマと深く関わる研究者を毎月招き、報告を聴きながら、帝国各地にミッション活動が残した足跡（有形・無形）とその意味を考えてきた。2003年４月以降も引き続き、各地域の専門家とともに上記テーマについての考察を深めることで、日本におけるミッション研究ネットワークをも構築したいと考えている。そこにおいて、「紛争と平和」のあり方についても議論を重ねることができればと思っている。

＊総合研究として研究することの必要性

ヨーロッパ文明を背負い、アジア・アフリカ各地にネットワークを広げたミッション協会、ならびに男女ミッショナリーの個別事例を「帝国」という枠組みに収める検証には、歴史学、人類学はもちろん、経済史、医学、生物学、建築学といった多くの学問分野の研究者が協力することが不可欠である。

＊研究チームメンバーと所属と研究課題

井野瀬久美恵（研究幹事）	文学部	「アフリカにおけるミッション活動とその現代的遺産」
安武　留美	文学部	「アメリカン・ミッションの活動―アジアを中心に」
北原　　恵	文学部	「ミッショナリーの図像学的分析」
岡田　元浩	経済学部	「帝国経済史の思想的背景とミッショナリー派遣問題」
玉利　祐三	理学部	「授乳をめぐるミッショナリーの身体観」
大江　　満	立教学院史資料センター・学術調査員	「近代日本におけるミッション活動の展開」
並河　葉子	神戸市外国語大学	「西アフリカにおけるミッション活動の諸相（１９世紀を中心に）」
宮崎　　章	大阪大学大学院文学研究科博士課程	「帝国とミッション研究」

◎研究課題　(No.85)

「日本・中国・沖縄における民間文化交流の研究」

＊研究の目的

いま、日本、中国、沖縄を含めて東アジアの交流関係の研究が活発に行われている。本研究は特に沖縄からの文化交流を中心に見ようとするものである。沖縄の歴史や文化を語るには、琉球国（1879年以降沖縄）が中国の明や清、日本の安土桃山や江戸と正式にあるいは自発的に海上交易を行っていたことと関係する。例え

ば中国との冊封船や進貢船、薩摩、大和との交易船を通じての政治経済外交関係の中のさまざまな文化交流があった。本研究は、沖縄を中心に民間レベルでの庶民文化資料を調査収集し、特に最近中国で公開された「档案」と呼ばれている資料を活用して、日本・中国・沖縄の民間文化交流の実態把握と史的事実を明らかにすること。同時に日本・中国・沖縄の研究関連の地を訪れて、フィールド調査をやり、より実証的に究明すること。さらに、三国間の影響関係や情報・文化の伝播と受容の問題を明らかにすることが本研究の目的と方向である。

＊研究の内容および効果

日本・中国・沖縄の民間文化交流関係を研究するのが、共通課題であるが、民間文化的な要素を含む民族芸能、言語、歴史文化、社会、庶民生活、医療厚生等に亘って総合的に研究していく。各々の専門領域に応じて簡単に取り組む内容と特徴を記しておこう。まず、沖縄の祭祀を中心に神話、民話、昔話を検証し、中国の媽祖信仰、琉球のニライカナイや祖先信仰、日本の神仏信仰などがどのように受容されているかを究明していく。芸能は沖縄のチョンダラー芸能に着目し、その伝承芸能や歌謡について、どれだけ日本本土の諸芸能の影響を受け、どれだけ沖縄独特の変容が加えられているかを解明する。また、中国から伝わってきた音楽芸能が、沖縄での受容と変容の過程を考察していく。言語関係は主に福州語が沖縄首里語に与えた影響を研究していく。現在、沖縄でも使っている言葉を調査、分類することによって、単語集を作り、その発音の特徴や変容状況を調べる。昔、中国から大量な漢語や歴史書物が沖縄に流入した。これらの漢語や書物は「海外知識の情報源」として、大事にされてきた。その活用方法や伝播経路や役割を再認識する。ここ数年、中国で公開された「档案」と呼ばれている資料（公文書のこと）には、清代の沖縄漂着民のことを詳細に記載されていることがわかった。中国の「档案」における歴史上の琉球人を描き出し、庶民の琉球人の自己認識について考察していく。医療関係は特に麻酔薬、麻酔手術の伝播について研究する。麻酔手術に関して、高嶺徳明の補唇術と中国福建省福州市の黄会友との関係、さらに、華岡青洲の麻酔薬と高嶺徳明戸の関係を明らかにする。その中から、情報の流れとはなんであるかを究明していく。この共同研究は日本人、中国人、沖縄出身の研究者からなっている。総合的に民間レベルの角度から、三国間の歴史的な民間文化交流の比較検証を通じて、日・中間にあって庶民としての琉球・沖縄人の全体像及び琉球・沖縄人の生活に関する文化の影響関係を明らかにする。これらを通じて当時の民間レベルでの国際理解が如何なるものであったか、今にも通じる国際問題の理解を解く鍵にもなると思う。

＊総合研究として研究することの必要性

本研究のような庶民的レベルの角度から日本・中国・沖縄の三国間の民間文化交流の研究はまだ充分ではなく僅少である。これからの民間の国際交流や国際理解には欠かせない課題であるため、もっと盛んに研究していく必要がある。そのために総合的学際的に行われる必要がある。

＊研究チームメンバーと所属と研究課題

高阪　薫（研究幹事）	文学部	「日本近現代文学、沖縄民俗学」
辻田　忠弘	理工学部	「感性情報、華岡青洲と高嶺徳明野研究」
胡　金定	国際言語文化センター	「中国語学、日中比較文化・文学」
真栄平房昭	神戸女子学院大学	「東アジアの海外情報と琉球の関係」
久万田　晋	沖縄県立芸術大学	「沖縄・奄美大島の民芸、民謡」
孫　薇	沖縄県公文書館	「福建省・琉球列島交渉史の研究」
新垣　敏雄	順天堂クリニック	「高嶺徳明と麻酔の研究」
辻田登美子	国際言語文化センター	「中国における麻酔術の研究」

◎研究課題　（No.86）

「道徳と科学のインターフェース：近代化の一側面」

＊研究の目的

近代化の課程で、道徳と科学はどのように係わり合いを持ち、いかなる役割を果たしてきたのか。イギリス・アメリカ・日本の近代化の意味を道徳と科学の視座から解き明かす。

＊研究の内容および効果

理想の臣下、臣民・市民・国民創出に重要な役割を果たした宗教と道徳は、近代国家の建設・発展・膨張期には、科学という概念と衝突し、融合し、新しい運動・学問・文化を生み出した。研究メンバーは、17世紀終わりから20世紀初めのイギリス・アメリカ・日本で広がった禁酒運動・女性運動・優生学・社会進化論・教訓小説を題材とし、それぞれの視点で道徳・科学のインターフェースと近代化の問題を究明する。

＊総合研究として研究することの必要性

イギリス・アメリカ・日本の事象を扱う歴史家・文学者・作家の共同研究により、近代化の一側面としての道徳と科学のインターフェースをトランスナショナルかつ学際的な視点から解明することが可能となる。

＊研究チームメンバーと所属と研究課題

安武　留美（研究幹事）	文学部	「女性運動、遺伝、道徳」
大坪　寿美子	CreightonUniversity Department of History Assistant Professor	「優生学、医学史、女性史」
黒岩　比佐子	ノンフィクション作家	「村井弦斎、食育、教訓小説」
中島　俊郎	文学部	「図像分析、禁酒運動、G．クルックシャンク」
Henning, Joseph M.	Saint Vincent College Department of History Assistant Professor	「進化論、H．スペンサー、日米外交論」

◎研究課題　(No.87)

「現代の青少年の諸問題」

＊研究の目的

ＩＴ化、グローバル化に伴う価値の多様化は、青少年の心にも多大な影響を及ぼし、理解しがたい事件や事故の多発は周知の事実である。あるいは、それほど重篤な状況でない場合でも現代の青年に対しては、日常的な人間関係のとり方や生活のリズムといったことにさえ目を向け、指導や援助が必要になっている。そして、現代の若者の心性を理解すると同時にその援助や指導のあり方について、研究することを目的とする。

＊研究の内容および効果

現代青年を理解するための研究会の開催、及び若者が置かれた現実の中で何を感じどう行動するかなどについて調査研究を実施することで、現代の若者の心性を理解し、学生の指導や援助をする際に役立てる。

＊総合研究として研究することの必要性

現代青年が抱える問題は、臨床心理学的、症状論、治療論の枠組みの中では、捕らえ切れない要因が含まれる。そこで、複数の学部・大学あるいはカウンセリングルームなどで対応する若者の現状を分析することが重要と思われる。

＊研究チームの研究と分担

高石　恭子（研究幹事）	文学部	「大学生にとっての不登校」
福島　孝夫	経営学部	「学生生活の充実の心の健康」
友久　茂子	学生相談室カウンセラー	「青年期の心の健康と問題」
内藤あかね	心理臨床カウンセラー	「青年の悩みの表現方法について」
青柳　寛之	甲子園大学人間文化学部	「青年期の競争心について」

◎研究課題　(No.88)

「ＮＰＯとコミュニティ・ビジネス
　　―ボランタリー・ネットワークの実態に関する比較研究―」

＊研究の目的

ＮＰＯとコミュニティ・ビジネスという新しい経済社会現象を対象とし、社会学や経済学、経営学の共通関心である「情報とネットワーク」の観点から、その実態分析を行うことを目的とする。

＊研究の内容および効果

本研究は、社会学や経済学、経営学のそれぞれから接近が試みられている新しい経済社会現象（ＮＰＯとコミュニティ・ビジネス）に対し、「情報とネットワーク」という学際的な視点から、その具体的な実態把握を行う。ここでいう新しい経済社会現象とは、ＮＰＯ（民間非営利組織）やＮＧＯ（民間非政府組織）、地域通貨、コミュニティ・ビジンネスなど、経済と社会、組織とコミュニティの中間領域とでもいうべき近年台頭著しい現象を指す。これらは現象が理論をはるかに先行しており、必ずしも十分な研究実績が存在しない領域であり、本研究の実証分析はその実態解明の進展につながることが考えられる。

また、経済と社会、組織とコミュニティの中間領域であるこれらの現象は、必然的に社会学や経済学経営学の学際的研究を強く要請することになる。本研究では、近年活発に議論が行われている社会情報論やネットワーク論、ゲーム論などの研究動向を踏まえつつ、それらを学際的に統合することを通じて、上記現象の解明を目指す。

＊総合研究として研究することの必要性

①上記の新しい経済社会現象に対し、個別の学問領域の理論枠組みからの説明が困難であるという点と、

②その説明に有効であると考えられる情報論やネットワーク論の分析視点自体が、社会学と経済学の学際的関心に基づいているため。

＊研究チームの研究と分担

鵜飼　孝造（研究幹事）	文学部	「コミュティ・ビジネスとネットワーク組織」
三上　和彦	経営学部	「ネットワーク（社会関係）形成プロセスのミクロ理論，意思決定論、ゲーム論」
宮垣　　元	文学部	「ボランタリー・ネットワークとNPO／NGO、情報組織論、ネットワーク組織論」